

---

# 魔法先生ネギま！転生者はヴァルキュリア人

MSF

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！転生者はヴァルキュリア人

### 【Nコード】

N6834V

### 【作者名】

MSF

### 【あらすじ】

神様から能力と武器をもらいネギま！の世界へ行きました。

## プロローグ

「どこどこ?」

「ようやく起きたか」

「誰?」

目の前にいるのはお爺さん。

「神」

「何の」

「そこ聞く必要があるのか?」

「じゃあ名前」

「ユーピテル」

ローマ神話の主神かよ。

「それでなんだ?」

「お主は死んでしまったのだ」

だからどうした。

「もう少し驚いてもいいと思うぞ。普通なら驚くのじゃが」

「生き物はいつか死ぬんだ。大して驚くこともない。それでここはどこだ？天国？地獄？」

「そうじゃな。常世の門、とでもいえばいいのかの」

つまりこの世とあの世の間ということか。

「そしてお主には転生してもらう」

「理由は？」

「娯楽じゃな。最近死者を転生させてそいつの人生を見るのが流行っておるのだ」

「そうかい。それで俺はどこに転生するんだ」

「それはこれからくじで決める」

そいつてユーピテルは虚空から商店街の福引のガラガラを取り出した。

「これを回せ」

ガラガラを回すと球が出てきた。

「何番だ」

「23番」

「えっと23番は……ここだな」

「なあ、その棚いつ出したんだ」

「お主がまわしている時だ。ではお主が転生するのはネギま! だな。特典は4つまでだ。なんでもいいぞ」

よりによってあの死亡フラグ満載のところか。しかし特典ねえ。あつさり死ぬのはやだからなあ。

「それじゃあ戦場のバルキュリアに出てくるヴァルキュリア人の体ってできるか」

「可能だ。それにしても大抵はチートになるんだがな。あとは不老不死とか魔眼とか」

あれも十分チートだと思うぞ。戦車の砲弾を盾で弾き返せるし。一個大隊くらいなら楽に殲滅できるぞ。

「あとは能力は最初から覚醒状態。あとはセルベリアが持つてる槍と盾」

「了解。……これでできたぞ。武器はアーティファクトになるがいか?」

「それでいい」

「ついでだから仮契約をしたことにしておこう」

「できるのか。そんな事」

「神は伊達じゃない。……よし、これでできた。他になんかあるか」

「住む場所とかどうなるんだ」

「それはこちらで用意する。戸籍と金も同様だ。必要な知識は向こうに着いたと同時に送る。生

活や学校に必要なものもすでに用意してある」

「そこまでしてくれるのか。ありがたいな」

「まあ義務みたいなものだ。言っておくがサポートはこれだけだ。今後は一切干渉しない」

「そうか。聞きたいことはもうない」

「わかった。それでは逝って来い」

神がそう言うといきなり俺が立っているところに穴が開いた。

「字が違うぞ」

そうして俺は穴に落ちて行った。

## 1話

「いきなり落とすか普通……。あの神いつか泣かす」

眩きながら立ち上がり部屋を見回すと床に封筒が落ちいた。

封筒の中には手紙と仮契約カードが入っていた。

「えーと『これを読んでいるということは無事についたということだ。お前の名前は村上 冬馬

だ。まあ頑張って生きろ。それと明日はお前が行く学校の入学式だ。遅刻するなよ。あとカード

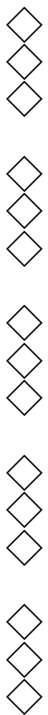
の使い方が来たれといえどアティファクトを出せる。しまうときは去れだ。ではよい人生を』……入学式明日かよ。せめて三日前とかにしてくれ」

此処でぼやいても仕方がない。幸い道順などは神からもらった知識があるから問題ない。

「とりあえず明日の準備しとくか」

まあ準備といっても制服の確認ぐらいしかないんだがな。

「寝るか」



俺は思ってたが校長の話って何でも長いんだ？もう10分も続いている。隣の席の奴なんか

眠っているぞ。催眠効果でもあるのか？

『これにて第〇〇〇回麻帆良学園中等部入学式を終わります』

ようやく終わったか。

さっさとこいつを起こして帰るか。（頼まれた）

「おい起きろカズ。入学式終わったぞ」

肩を揺すりながら呼びかける。

「んゝ、後「5分とか言うなよ」……5年待って」

「長い！そしてお前実は起きてるだろ！」

突っ込むと同時に頭を叩く。

「ばれたか。さすがだ」

「なにがさすがなんだよ」

こいつの名前は坂本 和哉。知り合ったのはついさっき。なぜか馬が合い仲良くなった。

「さっさといくぞ」

「はいよゝ。お前これからなんか予定あるか？」



席を立ち移動しながら聞いてくる。

「無いけど。そっちはなんかあるのか？」

「いやこっちも無い」

じゃあ何で聞いたんだ。

「学校は明日からで予定もなく暇だから」

なんで心の中を読めるんだ。

「それが俺の超能力」

「微妙だな」

「うん。俺ももう少し派手なのが良かった。せめてスプーン曲げが出来るくらい」

若干沈んでるようだ。でも超能力なんて何に使うんだよ。

「ガールズハント？」

「その言葉を使ってる時点で可能性は絶望的だな」

しかも何故疑問系。

「童貞が許されるのは小学生までだ」

「ならそいつに初体験はいつだと聞いてみる」

「と我が父が申ししていた」

そうなんだ。

「さてと、それじゃまっすぐ帰るので良いのか？」

「ああ」

「それじゃ出発」



とあるマンションの一室そこがおれの家だ。いまはカズが遊びに来ている。

「にしても一人暮らしってうらやましいぜ」

「実際楽じゃないぞ。家事は全部自分でやらなきゃいけないからな」

「俺が一人暮らししたらゴミ部屋になるな」

「そうなのか？」

「ああ。俺家事能力マイナスなんだ」

「マイナス!？」

「たとえば掃除をすれば余計に部屋が汚くなったりとか」

「確かにそれはマイナスだな」

「だから親にお前は何かもしないでくれと言われた。」

あー、それはなんというか……、強く生きろ。

「そろそ時間だしろ帰るか」

玄関まで見送る。

「そうか。それじゃまた明日」

「おう」

さてと夕食の準備をしてそのあと修行でもするか。

## 主人公設定

名前…村上 冬馬

人種…ヴァルキュリア人（表向きは日本人）

年齢…13

性別…男

身長…160cm

体重…50kg

見た目…11eyesの田島賢久（髪は茶髪。目の色は黒）

アーティファクト…名は戦乙女の盾と槍。形状は円盤状の盾と巻き貝のような槍。高純度ラグナイトで作られている。槍から放たれる蒼い炎は魔力や気とは全く別のモノ。最大出力では主力戦車をかすただけで破壊できるほどの威力を持つ。

ステータス（平均をBとする）

普段

ヴァルキュリア化後

筋力 C ↓ S+

耐久 B ↓ S++

敏捷 B+ ↓ S

魔力 C ↓ C

備考…体質により魔法の詠唱が出来ない。またヴァルキュリア化しているときは魔力及び気の使用も不可。ヴァルキュリア化はアーティファクト使用時のみ可能。その際銀髪赤眼に変化、戦闘能力は超人的なものとなる。倒せるのはバグキヤラくらい。(ラカンとか)

## 二話

麻帆良中等部に入学してから一週間が経った。友達も何人か出来た。担任は瀬流彦教諭だった。

まあ今は緊急事態なのでこの話はまた今度にしよう。

現在俺は鬼に囲まれている。何故こうなったかというと。

宿題の途中腹が空いたのでコンビニに夜食を買いに行く。

←

コンビニに向かう途中、いきなり五つの魔法陣が現れる。

←

魔法陣から鬼が現れる。

←

見つかる。囲まれる。

→

今ここ。

さてどうするか。倒すのは簡単だけど向こうに知られると面倒だからな。話し合いでどうにかならないかな。

「あのさ」

「なんや兄ちゃん」

「見逃して貰うとか出来ない？」

「悪いな兄ちゃん。目撃者は一人も生かすといわれとるんや。恨ま

んといてな」

ダメだった。普通に考えて目撃者残す必要ないもんな。はあ、こんな事ならダイオラマ球の武器庫からヴァールでも持ってきておけば良かった。

しょうがないか。こりゃばれるのも覚悟しておかないと。

ポケットから仮契約カードを取り出す。

「来たれ」

カードが消えると右手に盾が、左手に槍が現れる。それを掴むと体を蒼い炎が包み込むと髪が銀髪に、瞳の色が赤色になる。すると盾は回転しながら一回り大きくなり、槍の鏑のような部分が左右に展開し持ち手の部分が長くなる。

「兄ちゃん何m」

先頭の鬼が聞いてくるが、無視して槍で頭を叩き潰す。

「台詞ぐらい最後まで言わしてやぐげえっ!!」

二体目は胴を横殴りにして吹き飛ばす。五メートルくらい飛ぶと地面に頭から着地。動かなくなる。

「鬼畜や…」

「鬼か兄ちゃん…」

「涙も血もないんかいな」

あれ、なんか俺が悪者みたいな空気になってるんだけど。なんで俺のこと殺ろそうとした奴らに攻められてるの？

「鬼のお前等に鬼扱いされたくない。それに油断してる方が悪い」

「それもそうやな」

お互いに得物を構えると一斉に突っ込んでくる。

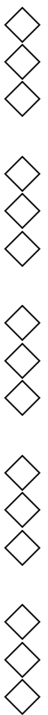
先頭の鬼が振り下ろした金棒を盾で右に受け流し槍で左胸を突き刺す。

残りの二体が左右から挟み撃ちにしてくるが俺は槍を引き抜くと跳躍で回避。槍から蒼い炎を放ち鬼を消滅させる。

「おしまいっ」と

槍と盾をカードに戻しすぐさまその場を去る。理由は魔法使いに見つかりたくなかったから。あいつら正義正義とうるさくて嫌なんだよな。言われたこと無いけど。まあ、魔力使ってないから調べられても俺だってばれることはないと思うがもしかしたらヴァルキュリアの力の方でばれるかも。でも大丈夫だろ。魔力や気とは一切違うモノだし。ばれないよな……きつと。

その後俺はまっすぐ家に帰りすぐに寝た。





## 翌日の放課後

学校から帰ってくると玄関のドアに一通の封筒が挟まっていた。封筒には差出人の名前はなく『坂上 冬馬殿へ』とだけ書かれていた。

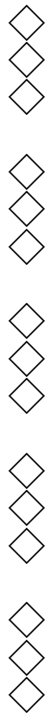
差出人は大体予想できる。おそらく学園長だろうな。つまりばれた。まあ覚悟はしていたけど。できれば違いますようにと祈りながら中の手紙を取り出す。

中に入っていた手紙にはたった一文書かれていた。

『本日午前0時に麻帆良女子中等部の学園長室までお越しください』

どうやら俺の祈りは神には届かなかった。てかよくよく考えてみると神様ってあれなんだよな……。やっぱ届かなくて良かった。

それにしてもなぜ指定場所が学園長なんだ。それにどうやって入るんだ。見つけたら不法侵入で捕まるだろ。とりあえず行ってみるか。何で俺だと分かったのか知りたいし。



## 同日深夜

さてとりあえず手紙に指定されたとおりに来たわけだがどうやって入るか。

校門の前で侵入方法を考えていると後ろから声を掛けられた。

「君が坂上 冬馬君かい？」

振り向くと後ろに死の眼鏡デスメガネタカミチことタカミチ・T・高畑がいた。

「貴方は誰ですか？」

名前は原作で知っていたいるが初対面なので一応尋ねる。

「僕はタカミチ・T・高畑。女子中等部で教師をしている」

「俺は坂上 冬馬。学園長に呼ばれてきました」

「用件は学園長から聞いているよ。付いてきて」

言われたとおり高畑教諭の後を付いていく。しばらく歩くと学園長室についた。

「学園長先生。坂上君を連れてきました」

「わかった。入ってくれ」

部屋にはいるとそこには……………学園長がいた。第一印象はあの頭部は何なんだ、だった。知的好奇心が旺盛な人ならきつとその頭を解剖させてくれと言いそうな気がする。無限の欲望の名を持つあの人とか。スカさんとか。

「あの、高畑教諭」

「なんだい坂上君」

「学園長は本当に人間なのですか」

「いきなりそれは酷くないかの」

「……………」

「タカミチ君!？」

「きっと……………いや多分……………人間だと……………思う……………よ……………」

「どんだけ葛藤があるんですか。」

「ま、まあそんな話はいつでもよかろう」

もしかしたら人類の根幹に関わるかもしれないのにそれをどうでもいいとは。

「フホン、と学園長が咳をして空気を切り替える。」

「さて君をここに呼んだ理由は幾つか質問があるからじゃ」

「まず、きみはヴァルキュリア人で間違いないかの?」

「いきなり直球キターーーー!!!」

「どうする。誤魔化すか? いやおそらく学園長は分かっている。誤魔化しても意味はないだろう。そうすると正直に話すしかない。」

「はい、そうです」

「やはりそうじゃったか」

「学園長、ヴァルキュリア人とはなんですか」

「タカミチ君はしらなかったの。まあ知らなくとも仕方なからう。現在分かっておるのは、彼らは遙か昔突然現れそして世界を襲った災厄を退けると忽然と消えたこと。魔力とも気とも違う力を持っていること。それだけじゃ」

「それだけ、ですか」

「そうじゃ。では本題に戻ろうかの。次に我々と敵対する気はあるか否か」

「そちらから手を出してこなければ敵対するつもりはない。だが害を加えるというのなら容赦はしない」

「そうか。では最後にこちらに協力してくれぬかの」

「……雇うという形でなら」

「わかった。こちらからは以上じゃな。君からは何かあるかの」

「二つ。何故俺がヴァルキュリア人だとわかったのですか？」

「先日おかしな反応があつての。それは魔力とも気とも違うモノじやった。気になったので遠見の魔法で見たら君が戦っている姿が見えたのじゃ。決め手になったのは身に纏った蒼い炎じゃ」

「ではどこでヴァルキュリア人の存在を知ったのですか」

「今は亡きは親友にヴァルキュリア人がいての。それで知ったのじやよ。それと渡す物がある」

学園長は机の引き出しから一冊の本を取り出し渡ししてくるのでそれを受け取る。大きさはハードカバーと同じくらい。表紙には『我等の同胞へ』と書かれており素人目にも古いということが分かった。にもかかわらずページの紙は新品と変わらないくらい白い。

「それはわしの親友が持っていた本での。何でもヴァルキュリア人について書かれているらしいのじゃがわし等には見えないのじゃ」

「見えないってどういうことですか？」

「そのままの意味じゃ。信じられぬというならタカミチ君に見せてみるといい」

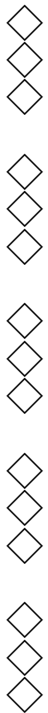
高畑教諭に本を渡す。表紙を睨むように見つめている。どうやら読めないようだ。

「僕にも読めないね」

どうやら読めるのは俺、というかヴァルキュリア人だけのようだ。

「では解散としようかの」

学園長の言葉によりこの場は解散となった。



朝 HR

教壇では担任の瀬流彦教諭が連絡事項を説明している。

「連絡事項は以上です。ああそれと坂上君」

なんだ？俺なんかしたっけ。

「学園長がすぐ学園長室まで来るようにと言っていましたよ。ちなみに荷物も持ってくるようにと」

は？なんで？

「冬馬、お前何したんだ」

「むしろ俺が聞きたい」

学園長に呼ばれる理由……。だめだ分からん。とりあえず行ってみるしかないか。

俺は教科書を鞆に詰めるとすぐに学園長室に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6834v/>

---

魔法先生ネギま！転生者はヴァルキュリア人

2011年8月21日05時52分発行